

## 「救いは近づいている」

2018年10月25日

ローマの信徒への手紙 13章 11節～14節 更に、あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています。今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいているからです。夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう。日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、主イエス・キリストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません。

パウロの言葉の背景には、主イエスの来臨による終末が直ぐに来るという信仰がある。この信仰を抜きにして、パウロの言葉を理解することはできない。終末は主イエスが大きな力と栄光を帯びて、天の雲に乗って来臨し、彼によって選ばれた人たちを集め、彼らは「神の国」を受け継ぐ。一方、呪われた者は「永遠の火」に投げ込まれる裁きの時である。キリストにある者は「神の国」に迎えられ、全き救いを得られると信じた。だから、ヨハネ黙示録の最後に「以上すべてを証しする方が、言われる。『然り、わたしはすぐに来る。』アーメン、主イエスよ、来てください（黙示録 22：20）」と書いているように、終末を待望したのである。当時の教会はこの終末信仰を等しく共有していた。この終末信仰は、今日、成り立つのであろうか。成り立つ重要な信仰であると私は信じている。

創世記は冒頭に「初めに、神は天地を創造された」と始まる。神が初めを造ったのだから、当然終わりをもたらししてくださる。その終わりは、神による完結、全き救いが成就する時である。この終わりを待ち望んで、今を生きるのがキリスト者である。19世紀、ドイツのブルームハルト牧師は牧師館の庭に馬車を用意していた。村人が理由を聞くと「主イエスが再臨した時、この馬車に乗って神の国に向かうのだ」と答えた。村人は嘲笑ったが、牧師は「終末の全き救いを望まず、今の苦悩にどうして耐えられるのか」と言った。終わりの希望が今の自分を生かすのである。キリスト教にとって、終末信仰は必須の信仰で、この信仰がキリスト教を生き生きと、ダイナミックに動かしたのである。

パウロは、「更に、あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています。今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいているからです。夜は更け、日は近づいた」と言っている。「時」はギリシア語では、「クロノス」と「カイロス」の二つがある。クロノスは分、時、日、月、年で刻む自然の時間である。カイロスは神が直接介入する「神の時」である。主イエスが「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と宣言した、主イエスが十字架で息を引き取られた、神殿の垂れ幕が真っ二つに裂けた、復活された、聖霊が降った、その時、人々がイエスはメシアと信じた。これらの時は、まさにカイロスであった。パウロは、キリストの再臨による終末の神の時、救いの時は近づいているので、眠りから目覚める時であると勧める。「夜は更け、日は近づいた。」、全き救いとなる日はもうすぐ来る。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着け、日中を歩むように、品位をもって歩もう。欲望を満足させようとする肉の心、酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、主イエス・キリストを身にまといなさい。終末を待ち望んで、今を、キリストに倣い、キリストに向かう生き方をしようと諭しているのである。